

## 第2弾芦川写真集第6回作品説明文

「芦川写真集」作品の紹介は今回の第6回をもって最終回を迎えました。これまでご覧いただきました皆様大変ありがとうございました。この写真集は2011年に出版したものです。芦川村が後に合併した現笛吹市、私が居住する相模原市、以前に勤務していた座間市の各図書館に、またモデルとなっていた方にも寄贈をさせていただいております。なお、本写真集は翌2012年に土門拳文化賞受賞のきっかけとなった作品で、2002年から2010年の9年間に撮影したものです。

今回紹介の作品は神仏を崇敬し、環境を愛し、先人の生活文化を継承する芦川住民の生き方を紹介する最終版です。集落で生まれた人が集落の人と結婚し、共に長年に亘る人生を歩んできた姿、そして芦川は将来どこに向かって進んで行くのだろう。そんな様子を表現したものです。芦川は現代にあって、少しばかり過去にタイムスリップした世界なのです。皆様も日本を訪れた際、風光明媚な観光地だけでなく、このような地に足をお運びいただき、ご自身の目で芦川を見つめていただけたら幸いです。

町場での生活に上手に適應できない子どもが、平穏な生活を取り戻すため村営住宅が用意された芦川に移住して来ることもありました。それは人情に満ちた住民の心と、豊かな自然環境が本来人が暮すに適合していることを示しています。

私は感動の多いこのテリトリーで撮影を続けられたことに有難さを感じ、さらに作品がウェブを通し皆様に紹介できたことに感謝を申し上げ「芦川写真集」最終回の説明とさせていただく次第です。

なお、次回からはこれまでの作品とは印象を異にした日本を象徴する景観であります「富士山」を数回に亘り紹介する予定です。季節を通じて色々な場所と時間を追い求めた作品ですので是非ご期待ください。



- 1 細い農道を登り終え、不規則な十字路に至ると右側の手前の角にこの石積みがありました。現在は台座だけ残っているようですが、どうやら道祖神が祀られていたようです。当時は外から入り込む災難を防ぐため、辻には道祖神が建てられたものです。



2 集落の中を貫く旧道から下の段を見ると、庭の隅に柿の木が一本立っています。葉もすべて落ちたこの時期に鳥に食べられず実が残っているのはきっと渋柿なのでしょう。このお宅も、お年寄りが元気ならば渋柿は取り込まれ美味しい干し柿に変身したことでしょう。



3 家を探ねましたが、ここは留守でした。夫婦で山仕事に出かけたのだろうか、それとも畑仕事だろうか。小屋の中にいた番犬は私の姿を見て、吠えることもなく人なつこく寄ってきた。従って今日の主役はご主人ではなくこの番犬にすることとなった。



- 4 このお宅は上芦川 (かみあしがわ) 集落では有力者のお宅と伺いました。
- 2002年に撮影しましたので、ご夫婦共に未だかくしゃくとされていますが、ご婦人は最近亡くなり、ご主人も年齢を重ね大分老けた様子となりました。
- ここでも史実を収め、後に伝えて行く写真の力をご覧ください。



5 この通路の右手奥に老夫婦が住んでいます。天気の良い日には杖を付いたご主人が、そしてその後ろからご婦人が支えるように手を添えゆつくりと二人で歩む姿が見られますが、本日は底冷えのする曇天なので散歩はせずに炬燵で暖を取っていることでしょう。



6 芦川村は周囲を山に囲まれているので高地は陽が当たりますが、低地では日陰の時間が長くなります。特に降雪の後はなかなか雪が解けず生活も不便なことが多くあります。例年この後に再三の降雪が続きますので、雪解けの春までには時間がかかります。暫くは不便に耐える生活が続きますので、うです。



- 7 道路脇の石積みの中に石仏が収められています。近づいて確認すると、「馬頭観世音」と彫られていました。芦川でも農耕に馬を使っていた時代が有り、その頃に建てられたものです。馬の守護神であり江戸時代に信仰が深まったと伝えられています。今でも住民の神仏に対する信仰心は薄れていません。



8 あるお宅にお邪魔した際、庭の端に積み上げられた小石と石仏が目に入りました。何かと思いご主人に尋ねると、そこには今は使われなくなった井戸が祀ってあるとのこと。赤い花の咲くしゃくなげの木の下で整然と管理がされた環境に家族の感謝の念を感じ取ったものです。



9 中芦川(なかあしがわ)でお世話になったお一人の訃報を聞き及んだ折、お墓に参りますと七本塔婆(しちほんとうば)が立て掛けられていました。一本の塔婆で七日間、七本で四十九日の法要をするものです。四十九日までは故人の魂は家にあり、これが過ぎると仏となって天に昇ると言われています。



10 芦川写真集最後のコマとなりました。これまでに6本の作品説明文を、そして59コマのキャプションをお示ししてまいりました。60コマ目は枯れ行くひまわりの花を、しかしながら花にはしっかりと実が育っています。こぼれ落ちて来年も咲き続けてくれることへの大きな期待は、芦川の将来に亘る繁栄を願う気持ちと重なり合うものがありそうです。

写真家 高橋ぎいち



